

平城宮東区朝堂院の調査 (平城第602次)

奈良時代後半の平城宮には、儀式や饗宴の場である中央区と、朝政の場である東区の2つの朝堂院があったと考えられています。東区朝堂院は第二次大極殿院の南側に展開した南北約284m、東西約177mの区画内に、12棟の朝堂が東西対称に並び、南には南門を構えていました。

東区朝堂院地区では、1980～90年代にかけて、地区東半を中心に発掘調査をおこない、奈良時代前半から後半にかけての朝堂、南門の規模やその変遷、区画を仕切る掘立柱塀から築地塀への変遷等がはっきりになりました。

東区朝堂院の東門は、1989年に部分的な調査をおこない(第203次)、基壇の南北規模があきらかになりました。今回の調査では、基壇の東西規模に加えて、東門の南北に取り付くと想定される築地塀の遺構、さらには奈良時代前半の東門周辺の様相をあきらかにすることを目的として、調査区を設定しました。調査面積は東西約14m、南北40mの約560㎡で、2018年10月1日に開始し、2019年1月21日に調査を終了しました。

今回の調査では、奈良時代後半の東門基壇、築地塀、雨落溝等を検出し、大きく2つの成果をあげることができました。

ひとつめは、奈良時代後半の東門基壇の東西幅があきらかになったことです。基壇東端は水路によって壊されていましたが、築地塀や雨落溝の遺構を検出したことから、東区朝堂院東側の区画の位置が確定しました。東門基壇も現存する部分から、この区画の位置までの距離を反転させることで、当初の東西幅が約10mと推定できました。つまり奈良時代後半の

東門の基壇規模は、南北約20m(66尺)、東西約10m(33尺)であったとみられ、この基壇規模は東院地区の東院南門(建部門)の基壇とはほぼ同規模であることもわかりました。

東門の上部構造は礎石建ちで、基壇規模から桁行5間、梁行2間と想定されます。基壇上面は後世に大きく削平され、礎石や根石の据付掘方等は残っていませんでしたが、周囲の雨落溝から多量の瓦が出土したことから、瓦葺であったとみられます。築地塀も同様に、雨落溝から多量の瓦が出土し、瓦葺であったことが推定されます。

ふたつめは、東区朝堂院の東西幅が600尺で計画施工されていたことが確実に became 事実になったことです。これまでの調査から東西幅は約177mと想定していましたが、先述のとおり、今回の調査で、東区朝堂院東側の区画の位置が確定したことにより、東区朝堂院の東西幅が約177m、当時の尺度の600尺(500大尺)で計画施工されていたことが確実になりました。

奈良時代前半の遺構は、現在整理中ですが、今回の調査成果からは、東区朝堂院の造営計画や、東隣の東方官衙地区や東院地区との関わり、さらには、藤原宮や長岡宮等、各宮城における朝堂院の変遷の実態を解明することにもつながると思います。

昨年12月15日には現地見学会を開催しました。晴天ではありましたが、とても寒い中569名の方にお越しいただきました。東区朝堂院の調査は、今回で最後となりますが、東門が開いた先にある東方官衙地区や東院地区の調査はこれからも継続しますので、今後の調査にもどうぞご期待ください。

(都城発掘調査部 福嶋 啓人)



調査区全景(奈良時代後半の遺構面、南東から)



現地見学会の様子